

緊急発掘調査報告書

浜射場・菖蒲沢遺跡

1977

伊那市教育委員会

伊那市農業協同組合

浜射場・菖蒲沢遺跡

はしがき

長野県伊那市西春近地区は埋蔵文化財の豊富な地として、古くより知られていました。これらの数多くの貴重な文化財が、過去数千年にわたって、地中に眠り続けてまいりましたが、ここ数年来の急激な開発によって、破壊寸前の状態に直面するようになりました。その主なる開発は、中央高速自動車道、圓場整備事業、大規模農道等であります。

現在、これらの危機を救うために、発掘調査をして、その成果を報告書にまとめて、記録保存という姿で世に公表しています。

この度、わが伊那農業協同組合が主体となって行なった。カントリー、養蚕团地事業の二つの工事地区内に周知の遺跡（浜射場遺跡）（菖蒲沢遺跡）が該当するとのことで、工事の着工以前に発掘調査をする必要性が生じたために、農協としては、発掘調査を市教育委員会へ御願いして、工事進直に支障のないような措置をしていただきました。

調査はまだ寒さが肌身にこたえる3月上旬から下旬にわたって行なわれ、多大な成果を収めることができましたことは、誠に喜びにたえません。

二つの遺跡の成果について、簡単にまとめて述べておくことにします。

浜射場遺跡では、竪穴3基、土塹5、菖蒲沢遺跡では奈良時代の竪穴住居址1軒、土塹1であります。

ここに、調査報告書の発刊にあたって、伊那市役所経済部農政課をはじめ、伊那市教育委員会、調査団の諸先生、発掘作業員の皆様に衷心より謝意を捧げます。

昭和52年3月15日

伊那農業協同組合

組合長 赤羽政喜

序

伊那市内には、多くの原始から中世に至る遺跡地や、古墳、あるいは城館址が集中的にあり、先住民族の生活について多くの実際的、あるいは貴重な資料を提供してくれている。これらの遺跡には住居址や遺物が含まれておらず、古代文化の偉大さに感嘆の念を抱くものであります。

今回、伊那市内で南部の西春近宮の原、諏訪形地蔵に於て、カントリー、妻籠団地設営事業を行うことになり、ここが遺跡地であることから伊那市教育委員会の直営事業として発掘調査を行なった。工事側の直接担当である伊那市役所農政課、伊那市農業協同組合の三者で十分な協議を行なった。規模が大きいので、相当の日数と費用を要したが、調査関係者の献身的な努力によって、初期の目的を達成できたことは誠に喜ばしい次第であります。

最後に、調査団長の友野良一氏、調査員各位の方を謝し、調査に全面的に協力をおしまなかつた伊那市役所農政課職員一同、伊那市農業協同組合理事者、職員一同に深甚な謝意を表し、厚く御礼申上げます。

昭和51年11月25日

伊那市教育委員会

教育長 松 沢 一 美

第Ⅰ章 まえがき 浜射場・菖蒲沢遺跡の環境

第1節 位 置

浜射場遺跡は長野県伊那市西春近宮の原部落、深妙寺をはさんで南と北の一帯をさしている。道順は飯田線下島駅で下車をして、西へ1km程登った位置にある。菖蒲沢遺跡は西春近御坊形部落の西端、中央道の直下にあり、飯田線赤木駅で下車し、西方へ約2km程の位置にある。

遺跡の名称

1 城平上	40 唐木原
2 城 平	41 唐木古墳
3 常輪寺	42 北丘B
4 宮 林	43 北丘A
5 山の根	44 北丘C
6 山 本	45 南丘B
7 常輪寺下	46 南丘A
8 上 村	47 南丘C
9 北 条	48 眼田原
10 上島下	49 山の神
11 上 島	50 上の塚
12 東方B	51 泽渡南原
13 東方 A	52 下小山原
14 村岡北	53 天伯原
15 村岡南	54 南 村
16 大 壇	55 東 田
17 中 原	56 天 伯
18 百 刈	57 下小山原
19 西垣外	58 井の久保
20 細ヶ谷 A	59 表木原
21 細ヶ谷 B	60 山の下
22 小出城	61 菖蒲沢
23 宮ノ原	62 富士山下
24 浜射場	63 富士塚
25 中 村	64 広垣外1
26 中村東	65 広垣外2
27 山寺垣外	66 鳥井田
28 白沢原	67 高達道
29 名 頭	68 西春近南小学校附近
30 名垣西古墳	69 安岡城
31 名垣東古墳	70 城の腰
32 名垣南	71 横吹手
33 児 墓	72 和手
34 鎌護塚	73 上手南
35 西古墳	74 宮入口
36 鎌護塚	75 寺村
37 東古墳	76 下牧
38 カンバ垣外	77 下牧經塚
39 丸 山	78 山本田代薬師堂



第1図 位置及び遺跡分布図

第2節 地形・地質

上伊那地方に全般的に通ずる大きな地形は、日本的に有名な盆地状地形を呈し、それは伊那谷と呼ばれ、同地方はその北部を占めている。西に木曾山脈（中央アルプス）、東に赤石山脈（東アルプス）とその前山である伊那山脈とにはさまれた形で南北に細長く展開している。これらの二つの山脈の最も低い面に諏訪湖に源を発し、延々と二百数十kmを流れ、太平洋に注ぐ天龍川が各所にわたって蛇行しながら、溝々と水をたたえて流れている。天龍川の両岸には何段にもわたって河岸段丘や複合層状地盤が大きく展開し、伊那谷独特の段丘状地形を形成している。

浜射場遺跡の所在する長野県伊那市西春近小出地籍は西は権現山塊（1749m）をまともに仰ぎ見るのが可能である景勝の地であり、北は小黒川、南は戸沢川の間の段丘上と権現山麓より発達した山麓層状地といわゆる複合層状地盤上に位置している。

菖蒲穴遺跡の所在する長野県伊那市西春近諏訪形地籍は北は藤沢川、南は宮田境までの範囲内に含まれている。南部は一段低くなっている。その中心部を堂沢川が流れ、両岸は見事な水田が開かれている。北部の一段高くなっている面は畑地で、大部分が桑畠となっている。

『西春近の全般的な台地は標高600m~700mで、小戸沢、犬田切川、藤沢川、大田切川等の連合堆積物であり、段丘は下島、沢渡附近は一段であるが、南部では二段に分れている。表面は東に向って18分の1と云う比較的急な傾斜を示している。現在、幼年谷に切開されて地表は幾つかの小さな耕地に分断されている。』（註1）

西春近地域を岩石の点から精査してみると、小黒川と犬田切川、藤沢川は花崗岩、戸沢川はホルヘルスであり、特に後者のホルンヘルスの存在は極めて異例である。

第3節 歴史的環境

西春近地区では、現在確認されている遺跡は80ヶ所を数える。そのなかで、発掘調査や部分的な調査が行なわれている遺跡は32ヶ所を数える。

中央道関係の遺跡としては、城平上、城平、山の根、大境、百駄刈、細ケ谷B、山寺垣外、白沢原、名堀、名堀東古墳、名堀南、北丘B、北丘A、南丘B、南丘A、菖蒲沢、富士山下、富士塚、和手がある。（註2）

圓場整備関係の遺跡としては、上島、（註3）、東方A、村岡北、村岡南、常輪寺下、北条がある（註4）。大規模農道関係の遺跡としては、北条、常輪寺下（註5）、小出城、浜射場（註6）がある。前述した遺跡を一つ、一つ、とりあげてその発掘成果について簡潔に述べてみると次のようになる。

城平上は遺構の発見はなかった。城平は織文時代住居址1、平安時代住居址8、墓塚5、中世時代地下倉3、中世時代古墳2、土塁9であった。山の根は織文時代住居址2、弥生時代住居址1、平安時代住居址4、堅穴2、土塁2、ピット列1、ピット群1であった。大境は平安時代住居址2、堅穴2、集石址1、土塁1であった。百駄刈は織文早期土塁5、織文後期住居址5、織文後期配石

址 1, 石圓遺構 1, 土括群 1, 土括 9, 平安時代住居址 1 特殊遺構 1, ピット群 1 であった。

細ヶ谷 B は土括 19, 集石塀 1, 溝状遺構 1, ピット群 1 であった。山寺壇外は土括 1, 壁址, 白沢原は遺構は存在しなかった。名廻遺跡は平安時代住居址 1, 溝状遺構 1, 名廻東古墳は横穴式石室 1, 名廻南は平安時代住居址 1, 北丘 B は縄文時代住居址 9, 堪穴 4, 土括群 2, 土括 12, 車丘 B は遺構は存在しなかった。南丘 A は縄文時代住居址 1, 平安時代住居址 2, 堪穴 1, 墓括 1, V 字状構造 1, 萩原沢は奈良時代住居址 11, 土括 4, ロームマウンド 2, 集石 1, 富士塚は土括 1, 横穴式石室 1, 富士山下は土括 4, 石組 1, 弥生時代住居址 2, マウンド 4, 和手は弥生時代住居址 2, 奈良時代住居址 6, 中世時代住居址 2, 堪穴 1 であった。

上島遺跡は縄文時代住居址 2, 平安時代住居址 2, 堪穴 5, 東方 A 遺跡は縄文時代住居址 1, 弥生時代住居址 1, 土括 3, 柱穴群 1, 堪穴 1, 溝状遺構 1, マウンド 2 であった。村岡北遺跡は住居址 1, 壁址 1, 道路址 1, 村岡南遺跡は縄文時代住居址 1, 土括 3, 外堀 1, 内堀 1, 柱穴群 2 地下倉 2 であった。

常輪寺下遺跡は縄文時代住居址 12, 奈良時代住居址 1, 土括 9, 柱穴群 2 であった。北条遺跡は縄文時代住居址 9, 奈良時代住居址 5, 平安時代住居址 3, 土括 1 であった。大規模農道に関しての遺跡である北条遺跡では配石 1, 土括 4, 常輪寺下遺跡では縄文時代住居址 6, 奈良時代住居址 1, 土括 7 であった。小出城址の西に位置する城南遺跡は縄文時代住居址 3, 堪穴 20, 浜射場遺跡は時代不詳の住居址 1, 縄文時代住居址 1, 奈良時代住居址 1 であった。前述した部分的な調査が行なわれている場所は南部の諫防形地区や下牧地区に集中している傾向が強い。鳥井田遺跡は平安時代の住居址や豊富な遺物出土量で注目されている。鳥井田遺跡の南に複合遺跡と知られている安岡城遺跡がある。本遺跡の周囲には城郭遺構としての高い土壁が残っており、中世時代がしのばれる。遺物としては弥生後期・中島式土器、中世陶器、内耳鍋、宋錢、ふいごの羽口、茶臼などがある。西春近南部を流れる堂沢川が天龍川と合流する段丘斜面上に下牧経塚がある。この経塚は東塚と西塚から成り立っており、平安時代末から鎌倉時代初期に比定される遺物を出している。遺物の内訳は東塚では鳥と植物の図柄からなるために、たとえば「松喰鶴鏡」とか、「菊花飛雀鏡」などといわれる和鏡 7 面、刀子 12 本、銅鏡製経筒 1 本、西塚からは和鏡 4 面、刀子 11 本、経筒 1 本である。

(小池政美)

参考文献

註 1 先史及び歴史時代の上伊那

註 2 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 伊那市西春近 昭和 47 年度

註 3 上島遺跡 1974 伊那市教育委員会

註 4 東方 A・村岡北・村岡南・常輪寺下・北条遺跡 1975 伊那市教育委員会
幸信土地改良事務所

註 5 北条・常輪寺下遺跡 1974 "

註 6 小出城(城塙)・浜射場遺跡 1975 "

凡　　例

1. 今回の発掘調査はカントリー設備に伴なう緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、カントリー設備に伴なう緊急発掘で、事業は長野県伊那農業協同組合の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和51年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文書記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

小池政美，田畠辰雄

○図版製作者

- ・発掘及び造構 小池政美，田畠辰雄
- ・遺物 小池政美，田畠辰雄

5. 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会があたった。

目 次

目 次	(5)
挿図目次	(6)
図版目次	(6)
第Ⅰ章 発掘調査の経過	(7~9)
第1節 発掘調査の経緯	(7)
第2節 調査の組織	(7)
第3節 発掘日誌	(8)
第Ⅱ章 遺 様	(10~16)
第1節 墓 穴	(11~13)
第2節 土 扱	(13~16)
第Ⅲ章 遺 物	(16~21)
第1節 土 器	(16~17)
第2節 石 器	(18~21)
第Ⅳ章 まとめ	(21)

挿図目次

第1図 位置及び遺跡分布図	(1)
第2図 地形図	(10)
第3図 遺構配置図	(11)
第4図 第1号竪穴実測図	(12)
第5図 第2号・3号竪穴実測図	(13)
第6図 第1号土括実測図	(14)
第7図 第2号土括上部及び下部実測図	(15)
第8図 第3号土括実測図	(15)
第9図 第4号土括実測図	(16)
第10図 第5号土括実測図	(16)
第11図 土器拓影	(17)
第12図 石器実測図（その1）	(19)
第13図 石器実測図（その2）	(20)

図版目次

図版 1 遺跡全景
図版 2 遺構（竪穴）
図版 3 遺構（土括）
図版 4 遺物出土状況

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

近年、農業経営に急激的な変化が生じてきた。それは、手間を費やした割合には収入が増加しないということである。このような理由で離農するケースが急増してきた。そこで、農家の最も頼りになる農業協同組合は各種の多角的經營を奨励して、農民の生活水準を高揚させようと努力している。その証しとしては、各地に米をもみのままで保管しておく、カントリーエレベーションの建設である。伊那市内では東春近地区が最初であった。西春近地区は市内では2番目に計画されており、本年4月より工事に着手するという情報が2月下旬に教育委員会に通達されてきた。早速、教育委員会は建設予定地が浜射場遺跡に該当すると主張し、農業協同組合と協議して、記録保存を、また発掘調査は工事に支障のないように3月中旬に実施すると確約した。

第2節 調査の組織

浜射場遺跡発掘調査会

調査委員会

委 員 長	松 沢 一 美	伊那市教育委員会教育長
副 委 員 長	福 沢 純一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委 員	坂 井 喜 夫	伊那市教育委員長
"	向 上 雅 重	長野県文化財専門委員
"	木 下 南	上伊那教育会会长
"	辰 野 伝 南	伊那市文化財審議委員
調査事務局	竹 松 英 夫	伊那市教育委員会社会教育課長
"	石 倉 俊 彦	課長補佐
"	小 池 政 美	主事

発掘調査団

団 長	友 野 良 一	日本考古学协会会员
副 団 長	根 律 清 志	長野県考古学会会員
"	御子柴 泰 正	"
調 査 員	小 池 政 美	"
"	田 烟 辰 雄	"
"	辰 野 伝 衛	"
"	福 沢 幸 一	"
"	赤 羽 義 洋	国学院大学学生

第3節 発掘日誌

昭和51年3月1日 午前中手配しておいたブルドーザによって耕土の表面を排土してもらった。耕土層は浅くて20cm程でローム層に達した。発掘器材を官田より運搬してもらう。本年度は1年間を通じて発掘調査が予定されているので、できるだけ多量の器材を運搬するようにこころがけた。午後よりグリットを設定する。グリットは一般的に使用されている2m×2m、面積4m²のものをこしらえる。その名称は南北A～Y、西から東へ1～28と定める。

昭和51年3月2日 A1よりグリット掘りを南から北へ、西から東へ、一つ、1列置きに始める。各グリットから遺物はしばしば出土したが、午前中は遺構の検出はなかった。H3、F7のグリットよりそれぞれ墨土の落ち込みがみられ、前者を第1号竪穴、後者を第1号土払とし、それぞれプラン確認のために周囲を拡張していく。双方の遺構の共通するものとして、石の存在があげられる。これらの石は細ケ谷部落に産するホルンヘルスが主となっていた。後者のそれは大きくて疊1枚程もあった。作業員の顔ぶれは一年ぶりにみると人が大部分で、なつかしさがこみあがてきた。遺物としては縄文中期、縄文の内式、縄文晩期の土器片、石器等であった。

昭和51年3月3日 グリット掘りを昨日に引き続けて東側へと掘り進んでいくと、第1号土払の南側に円形状の黒い落ち込みがみられ、これを第2号土払とする。第2号土払の東側に石を持った小さな落ち込みがあり、これを第3号土払とする。第3号土払の南側に第4号土払を発見する。

昨日、検出された第1号竪穴の掘り下げを行なっていくと覆土中よりかなり大きな破片の縄文前期土器片が出土した。第1号土払、第2号土払と第4号土払の完掘を終える。第1号土払、第2号土払はともに覆土中に石を持ち、前者からは、縄文時代後期の壙の内式土器片が出土した。

第3号土払は土払の上部に自然石を集石状に置いてあった。午後になって、東側に新たにグリットを設けて掘り始めるが桑園の深耕のために強度を犠牲が地下深くまでに及んでいた。

昭和51年3月4日 第1号竪穴の掘り下げを、昨日に引き続いて行なう。竪穴は底部へ行に従って袋状になっておりまた、それに近いレベルより沈線文の発達が顕著な土器片が出土した。昨日、設定した東側のグリットを掘り進めていくが、散片の土器や石器の出土をみたが顕著なものはみられなかつた。

午後、森林地帯へ入り、グリット掘りを進めいくと、縄文時代



発掘風景

晩期の大洞式の土器片の出土がみられた。

昭和51年3月5日 森林地帯のグリットを西から東側へと掘り進めていくが、遺物の出土量は全般的に少なかった。ただ、X1、X2、Y1、Y2附近に集中的に大洞式、茅山式の土器片の出土があり、遺構の期待ができる唯一の場所となった。午後、地主がきて、木の採材をしてくれた。

昭和51年3月6日 昨日と同じように今日もグリット掘りを進めていくと、Y1～Y2にかけて褐色土の落ち込みがあり、土払5とする。午後、昨日切った木のあとかづけをする。

昭和51年3月8日 森林地帯へ設定したグリットを東へ、東へと掘り進めていくと、数片の土器や石器は出土するが、遺構の存在はみあたらなかった。U10に竪穴状のものがみつかり、第2号竪穴。これを北側へ拡張していくと、第2号竪穴を切るようにして同じような竪穴があり、第3号竪穴とする。

昭和51年3月9日

第1号土払、第2号土払、第3号土払、第



発掘風景

4号土払、第5号土払、第1号竪穴、第2号竪穴、第3号竪穴の完掘と写真撮影をする。

昭和51年3月10日 第1号土払から第5号土払、第1号竪穴から第3号竪穴の実測、全周囲の作製、発掘器材のあとかづけ。

昭和51年10月 図面の作製及び拓影図の作製。

昭和51年11月 報告書の編集をする。

昭和51年12月 原稿を印刷所へ送る。

(小池政美)

作業員名簿

北原一喜	平沢善雄	辰野みき子	城倉 一	城倉房子	辰野美佐子
城倉ふき子	唐木 輝	唐木高志忠	唐木 淳	平沢公夫	平沢友子
武田政弘	武田敏明	唐木好美	城倉初美	城倉孝子	三沢 隆
平沢美和子	西尾 仁	小松美恵子			

第Ⅱ章 遺構



第2図 地形図

第1節 穴

第1号堅穴 (第4図、図版2)

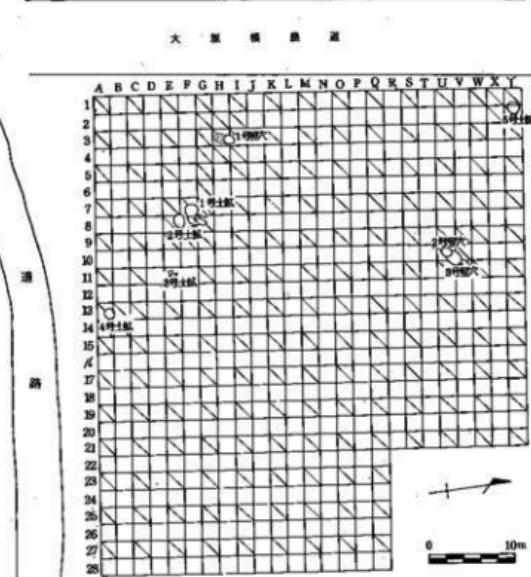
第1号堅穴は中疊混じりのローム層中を70cm前後掘り込んで構築されている。平面のプランは東西に長軸方向を有し、部分的には幾分割を持っている個所も認められるが、全般的には長円形を呈している。規模は南北90cm、東西1m15cmを測定。壁は全周しておらず、東壁は垂直に近く、他はやや内傾している。東壁の一部分は断面袋状となり、下へ入り込んでいる。壁高は深くて70~80cm位の間に及んでいる。

床面はローム層中をかたくたたいてつくってある。中央部はやや低くなっている。さらに、西から東へかけてだらかな傾斜をしている。遺物は縄文前期末葉の土器片を出土している。堅穴の周囲の、南側と東側に集中的にみられる石は全てホルンヘルスであり、構築時の堅穴を掘り込む際に出た石をそのまま捨てた姿であろう。

第2号堅穴 (第5図、図版2)

今回発掘した最北部の森林地帯の中に検出された堅穴で、北側の第3号堅穴を切るようになっていた。この地区は森林地帯の為か、腐植土が多く、ローム層まで70cm程もあった。この地区的ローム層は微疊するも含んでいなかった。

ローム層を掘り込んだ堅穴で、その規模は南北90cm、東西1m程を測定できる。全般的なプランは北側は角が三カ所あり堅穴の上辺は丸味状の直線になり、南側は割合にきれいな円周を描いている。植物の果のような形をしているように見える。



第3図 遺構配置図

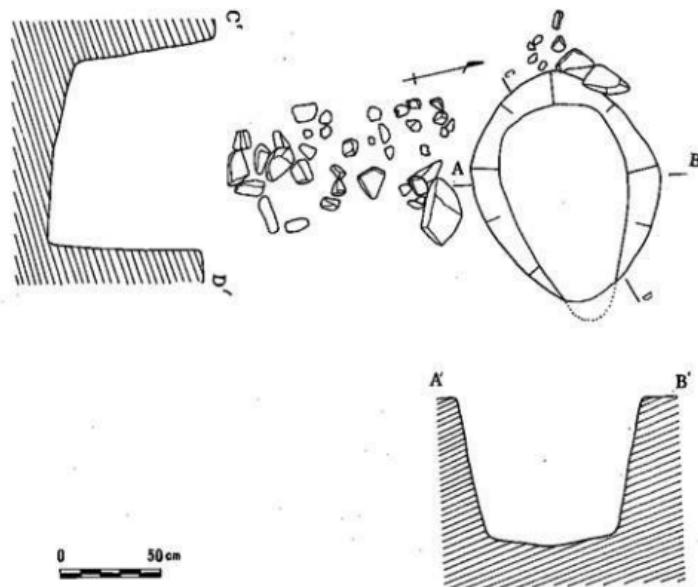
壁は傾斜が著しいが、壁面の凹凸は少なかった。壁高は80数cm位あり、したがって壁面の下部はハードローム層に達していた。床面はわずかに凹凸が認められ、ハードローム層で硬いうえに、さらにたたいてあった。覆土中より少量の炭火物が検出されたが、遺物の出土はなかった。

第3号竪穴（第5図、図版2）

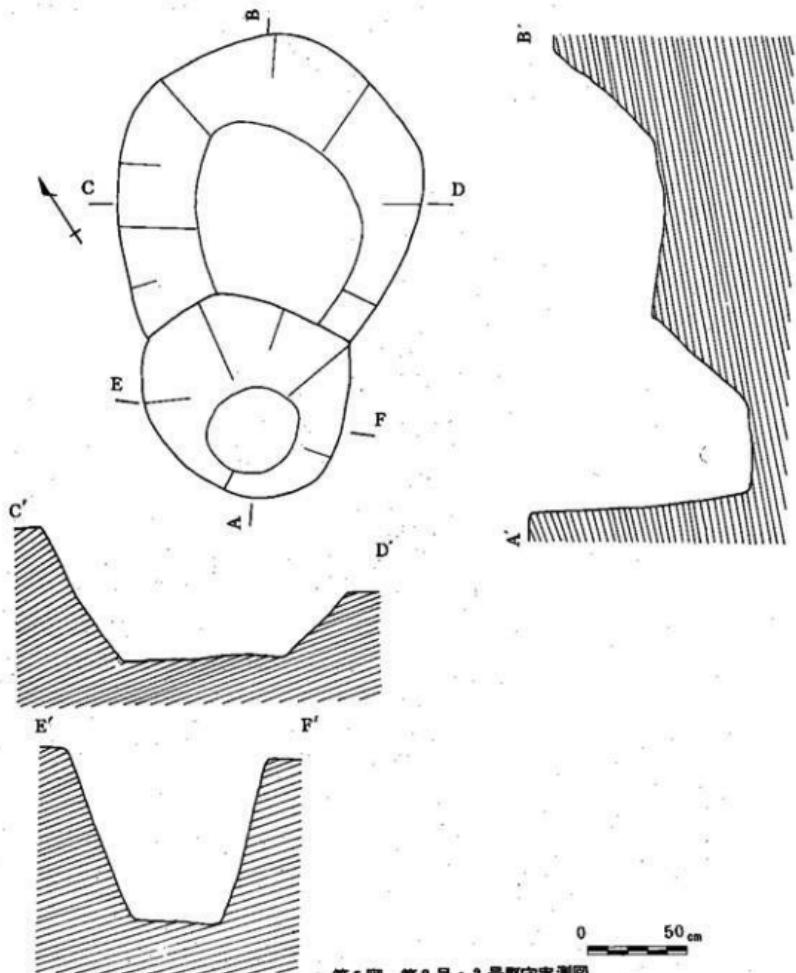
第2号竪穴で南側は切られた竪穴で、南北1m30cm、東西1m50cm程を測定できる。プランは北側では辺状になり、南側は切られてしまつて明らかではないが推定するに円周状を呈していたと思われる。全体的なプランは長円形状になると思われる。壁高は60cm前後であり、北壁は内縁、西壁と東壁は外縁が極めて強くなっている。微かな状態は第2号竪穴と大差はなかった。

床面はハードローム層中につくられ、かたいタタキになっていた。覆土は黒色土が落ち込み、その中より微量の炭化物の検出はみたが、遺物の出土はなかった。

（小池政美）



第4図 第1号竪穴実測図



第5図 第2号・3号空穴実測図

第2節 土 拂

第1号土拂 (第6図、図版3)

本土拂はF 7を中心にして回りのクリットF 8, G 7, G 8に関連する土拂であった。砂礫混り

のローム層面を掘り込んだ土塹であり、南北1m60cm、東西1m30cm位の規模を有している。壁は内縁が著しくて、壁面には凹凸がほとんど認められなかつた。床面はローム層のかたいタタキになつてあり、大体水平であつた。土塹の東側の石はホルンヘルスの大石であり、ローム層に深く埋設しておつた。どのようなことで、この地にあるのかは不明であつた。覆土中より少量の炭化物の検出が認められた。遺物は壙の内式の土器片が出土した。

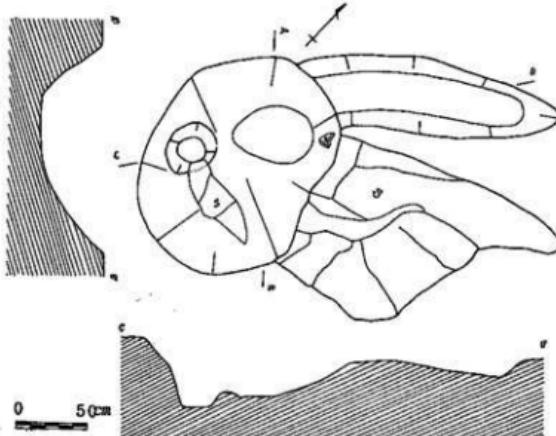
第2号土塹 (第7図、図版3)

本土塹は第1号土塹の南東の位置、E7、E8、F7、F8にかけて発見された。南北1m45cm東西1m75cm位の大きさで、表土面より-40cm位下った砂疊混じりのローム層中に構築され、平面のプランは長円形を呈している。

壁高は30cm~40cm位の間を測定でき、壁面の凹凸は少なかつた。

壁面の傾斜は南、東はなだらかであり、北、西は内傾していた。

床面はかたいタタキになつておつた。大体水平となつていて。覆土は黒色土が落ち込んでおり、そのなかに少量の炭化物を検出できたが、遺物の存在はなかつた。



第6図 第1号土塹実測図

第3号土塹 (第8図、図版3)

本土塹は表土面より-40cm位下った茶褐色土層面の下部に見事に石を敷いてあつた点で他の4つの土塹とは異つてゐる。石は上下二段より成り立ち、全て、ホルンヘルスであった。範囲は南北45cm東西50cm位で、形は方形状になつてゐた。二段の石を取り除いてみると、その下は円形で黒土が落ち込んでおり、土塹となつた。土塹は南北60cm、東西53cm位の規模で、円形プランを呈しており、深さは20cm位であった。壁面は内傾気味で凹凸はなく、割合に良好であった。床面は固いタタキになつておつた。水平で、しかも、かなり良好であった。遺物の出土は全くなかった。

第4号土括 (第9図、図版3)

遺跡発掘地区内で発見された遺構のうちでは最南部のA13からB13の2つのグリットにわたって検出された土括である。土層は耕土が30cm程あり、その下の砂疊混りの黄褐色土層を掘り込んで構築されている。平面プランは、南、西、北、東の四隅はわずかに角張ってはいるが、全般的には円形プランと考えられる。

形状は南北1m11cm、東西1m35cm程を測定できる。壁面は大般にフラットで、わずかにタタキになっていた。南、北は内傾が強く、東、西は内縁がそれぞれ強かった。

床面はわずかにタタキになっている。断面図でみると限りでは、南北の場合は中央部のほんの一部分が上がっているようだった。

遺物は何も出土はなかったが、少量の炭化物の検出をみた。時代決定は前述の事実より不詳である。

第5号土括 (第10図、図版3)

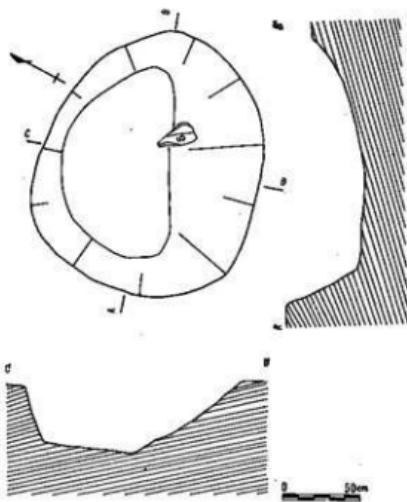
遺跡発掘地区内で発見された遺構のうちでは、最西部から最北部にあたるY1、Y2の2つのグリットに東西にわたって検出された土括である。

平面プランは東側は若干、円周状に突き出しているが、全般的には円形プランの内に含まれる壁面はローム層をきれいに掘り込んでつくらされている。壁面の下部は固くたたかれていた。北壁と東壁は内傾が著しく、東壁、西壁は内縁が強くなっていた。

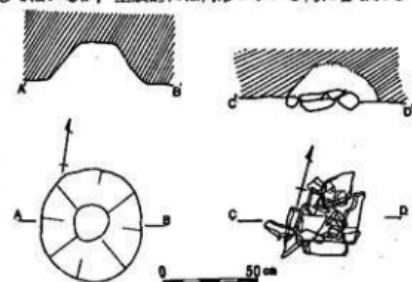
床面は微細な変化があり、固くたたかれていた。遺物の検出はみられなかつたが、覆土内より少量の炭化物と焼土の検出があり、確実に遺構の決め手となつた。

今回、発掘では5個の土括の検出がみられたが、関連性についてはつかめなかつた。

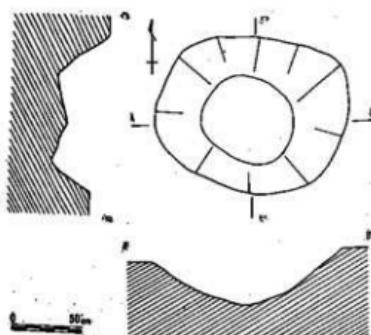
(小池政美)



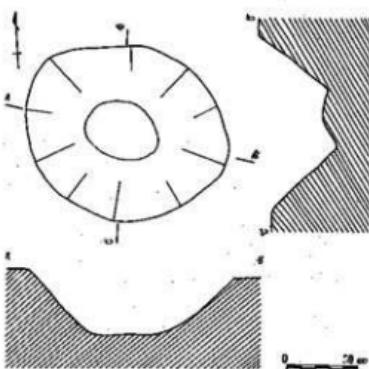
第7図 第2号土括実測図



第8図 第3号土括上部(右側)・下部(左側)実測図



第9図 第4号土器実測図



第10図 第5号土器実測図

第三章 遺物

第一節 土器 (第11図 1~18)

浜射場遺跡からは縄文時代各期に亘る遺物が相当量発見された。縄文時代としては、早期末葉、前期後葉、中期中葉、後期前・中葉晩期の土器があり、遺構に直属する遺物はほんの少量であった。

(1~2)は第1号竪穴の壁面に密着して出土した土器片である。文様は全て、沈線によって成り立っている。1は沈線が縦位、横位、斜目状、山形状に配してある。1は黄褐色、2は黒色を呈している。縄文前期末葉の下島直後形式と推定できよう。(3)は第1号土器内より出土したものである。文様は口縁部に方形状の刺突文が等間隔に横位に走り、破片中央部附近に右から左下にへら先により沈線が斜走している。黒褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は中位である。縄文後期前葉の器の内式に属するものであろう。

(4~5)は第1号竪穴の南側、ホルンヘルスの自然石があつまつた中より出土した土器片である。文様は、双方とも、荒い斜縄文が入っている。少量の雲母を含み、黒褐色を呈し、焼成は中位である。時期は縄文前期後葉に属していると思われる。(6)は表裏両面に擦痕が走っているもの赤褐色を呈し、多量の纖維を含み、焼成は中位である。茅山系統の土器片であろう。

(7, 8, 11)は器面全体にわたって、斜縄文が施されているもの。赤黄褐色を呈し、多量の雲母を含み、焼成は中位である。諸畿系統の土器片であろう。(9)は薄手で外反する口縁部破片であって、文様は口唇直下では二本横位に沈線が走り、その下に沈線を籠目状に配してある。下島直

後形式あたりに含まれるものであろう。(10)は縦位に沈線を配し、そのなかに刺突文が押捺してある。黒褐色を呈し、少量の露母を含み、焼成は中位である。勝坂式に属していると思われる。

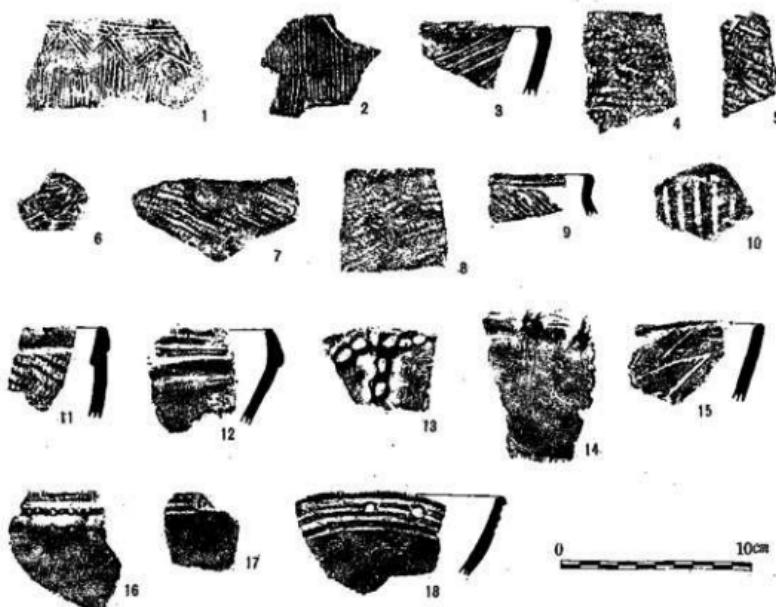
(12)は内擣する口縁部の破片であって、破片の上半分に文様が集中し、その内訳は上に沈線が横走し、下に横位隆帯が附加されており、下部は無文を成している。赤褐色を呈し、焼成は良好である。(13)は無文部の上に粘土紐による貼付を8の字状と連鎖状に組み合わさったような形に構成してある。黄褐色を呈し、内面に無数の擦痕が走り、焼成は中位である。(14)は口縁部に近い破片で、くの字状に曲がる浅鉢型の土器と思われる。破片上部にピーナツ状の貼り付けをしてある。赤褐色を呈し、焼成は良好である。

(15)は口唇部に沿って刺突文が横位に走り、下部には右側を頂点とする沈線が三角形状に施されている。黄褐色を呈し、焼成は中位である。(12-15)は壺の内式に属していると思われる。

(16)は無文部に細い粘土紐を横位に貼り付け、その上に円形状の刻目をつけてある。赤褐色を呈し、多量の露母を含み、焼成は良好である。加曾利B式であろう。

(17-18)は浅鉢型土器であり、口縁部に沿って、横位に沈線が数条走っている。(18)は補修孔と思われるものが2個あいている。黒褐色を呈し、焼成は良好である。

(小池政美)



第11図 土器拓影

第2節 石 器

本遺跡の縄文時代の石器は総数で30点あり、一応、石器としての体裁を整えている18点をここに記載した訳である。

縛 器 (第12図1・2)

半方円形状(1)、半橢円形を呈する。方円形状や橢円形の縁の片面から剥離を加えている。ようするにチップ状のものである。石材は硬砂岩である。

敲打器 (第12図3)

三角円形状に近い形を呈し、下部の先端部をたたいて手を加えてある。硬砂岩を用いてある。

名称不明石器 (第12図4)

大部分は自然面を残し、右側縁と左上部側縁に剥離の跡がみられる。どちらかといえば横刃形に近い形である。石質は硬砂岩である。

打製石斧 (第12図(5~8), 第13図(1~8))

分銅形(A)、くびれ部が大きく下部にある櫛形(B)、下部がわずかにひらく短冊形(C)、くびれ部が小さく上部にある櫛形のもの(D)、長方形に近い短冊形(F)の5つの形態に分類して説明を加える。

A 分銅形 (第12図5)

中央部附近にくびれた部分を持ち、分銅形となっているものである。上部は欠損している。刃部は製作当時には双方にあったものと考えられる。石質は硬砂岩である。

B くびれ部が大きく下部にある櫛形 (第12図6, 8, 第13図1, 2)

くびれ部の作り出しがはっきりしている。(第12図6)は上部と左下半部は欠損している。刃部は(13図1~2)は丁寧に調整されているのに反して、(第13図(6~8))はつぶれてしまっている。石質は(1, 6, 8)は硬砂岩、2は安山岩である。

C 下部がわずかにひらく短冊形 (第12図7, 第13図4)

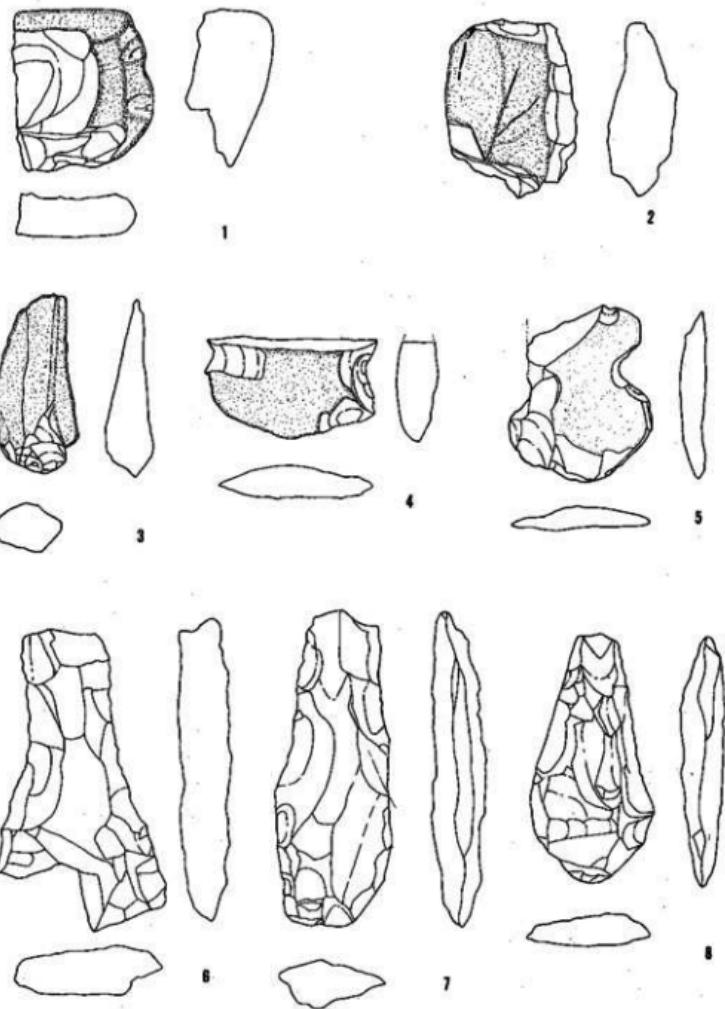
(7)の製作工程は荒い、それは石質が粘板岩の為であろう。4は石斧としては小型の類に属しており、刃部の調整は硬砂岩にしては普通である。

D くびれ部が小さく上部にある櫛形 (第13図3)

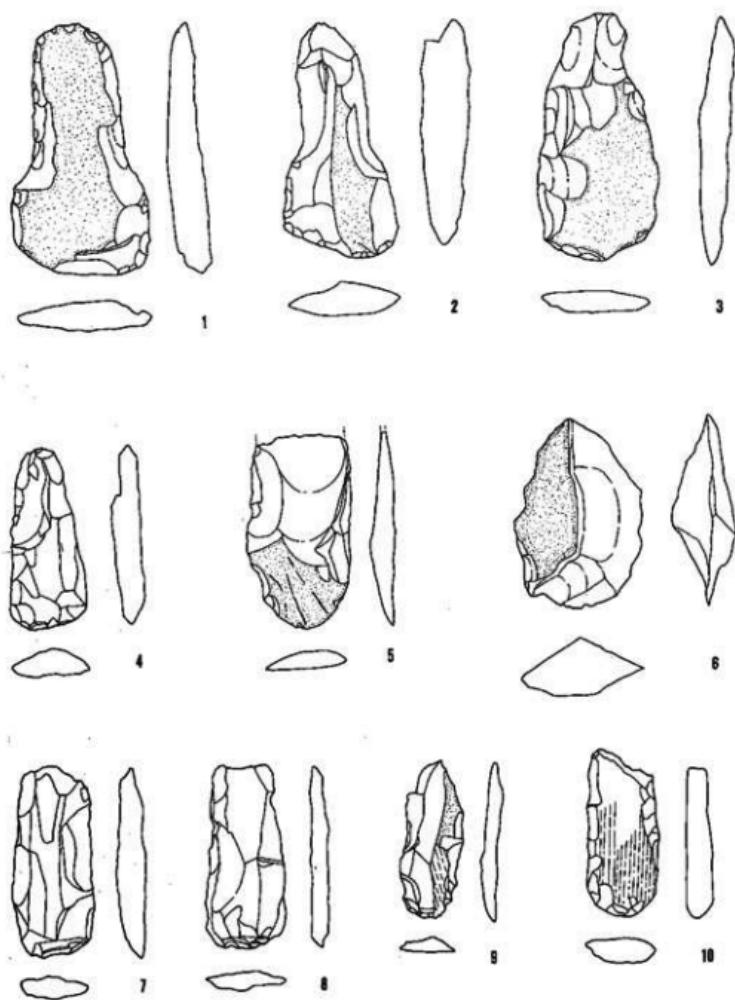
上部くびれは小さくて一見するとつまみ状になっている。つまみは右側の方が深くてくの字状になり、左側のそれはわずかにへこんでいる方である。石質は硬砂岩である。

E 橢円形 (第13図5~6)

側面にくびれ部分はない。刃部の使用痕ははっきりとしない。硬砂岩を利用している。



第12図 石器実測図（その1）（1:3）



第13図 石器実測図（その2）（1:3）

F 長方形に近い短冊形（第13図7～8）

典型的な短冊形の石斧であり、石材が砂岩（7）、粘板岩（8）のために調整したときは丁寧にしてあったと思われるが、現在は刃部は磨滅してしまっている。

磨製石斧（第13図9～10）

（9～10）はともに上部は欠損してしまっており、小型の石斧に属している。（9）は部分的な（10）は全面的な磨製にそれぞれなっており、石質は縞泥岩である。

（小池政美）

第Ⅳ章 まとめ

浜射場遺跡の調査は今回で第2次調査となる。第1次調査は昭和49年度の夏に大規模農道開通の際に実施され、報告書として、まとめられている。その結果については、第1章 まえがき、浜射場・菖蒲沢遺跡の環境の中でふれた通りである。前回の調査区は遺跡地の西端の一部に該当する地区に含まれている。今回は、その東側に展開する地区的調査であった。

遺構は竪穴・土括が検出され、その数は前者では3、後者では5であった。時代別の内訳は竪穴では縄文前期終末期1、時代不明2、土括では縄文時代後期前半1、時代不詳4であった。竪穴の大きさは1m～1m50cm位の範囲内にあり、平面プランは長円形や、不定形のものであった。深さは60～80cm位を測定できた。第2号・第3号竪穴では切り合い関係になっていたのが、わずかな特徴であった。

土括の大きさは50cmから1m60cm位のうちにあり、平面プランは円形・長円形を呈していた。深さは30～50cm位の状態であった。第3号土括のように掘り込み面の上部に石を敷き詰めたものも存在していた。

遺物では土器・石器が出土している。土器では、縄文早期末葉から縄文早期までの各時代に亘っており、考古学で重要視されている編年で見るならば、茅山式・下島直後形式・勝坂式・堀の内式・加曾利B式・大洞式であった。石器では、総数30点の出土があったが、そのうちの18点だけを記載した。石器に関しても、土器同様に各時代に亘っていた。その主たるものは、礫器・敲打器・名前不明石器・打製石斧・磨製石斧であった。石質は硬砂岩・安山岩・砂岩・粘板岩・縞泥岩が大部分であった。

（小池政美）



遺跡地を南側より望む

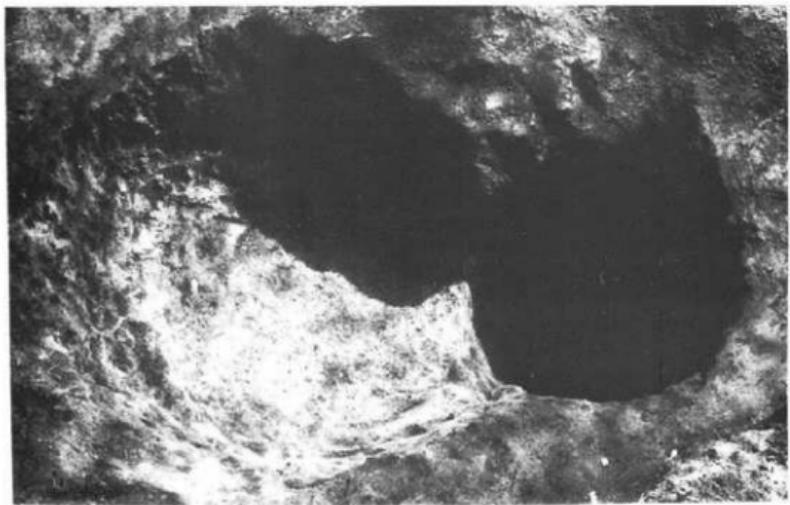


遺跡地を西側より望む

図版1 遺跡全景



第1号竪穴



第2号・3号竪穴

図版2 遺構(竪穴)



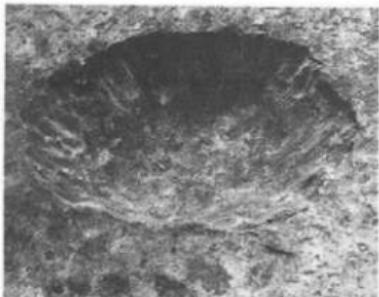
第1号土块 及 第2号土块



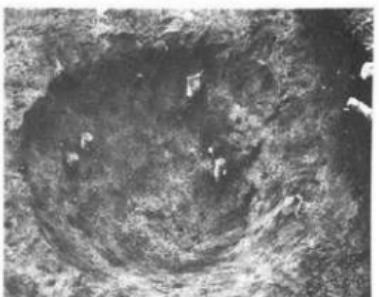
第3号土块 上部



第3号土块 下部



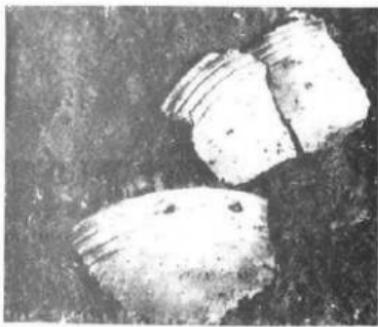
第4号土块



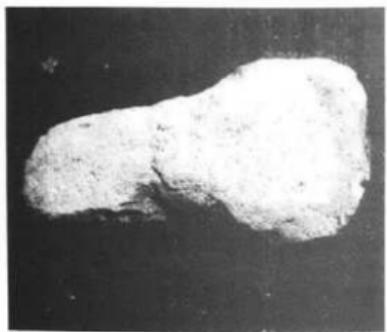
第5号土块



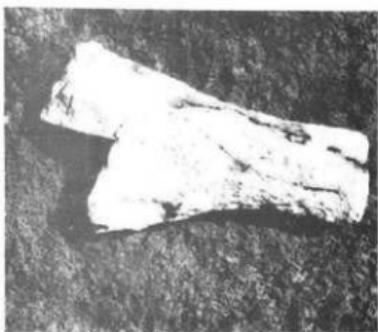
土器出土状况



土器出土状况



石器出土状况



石器出土状况

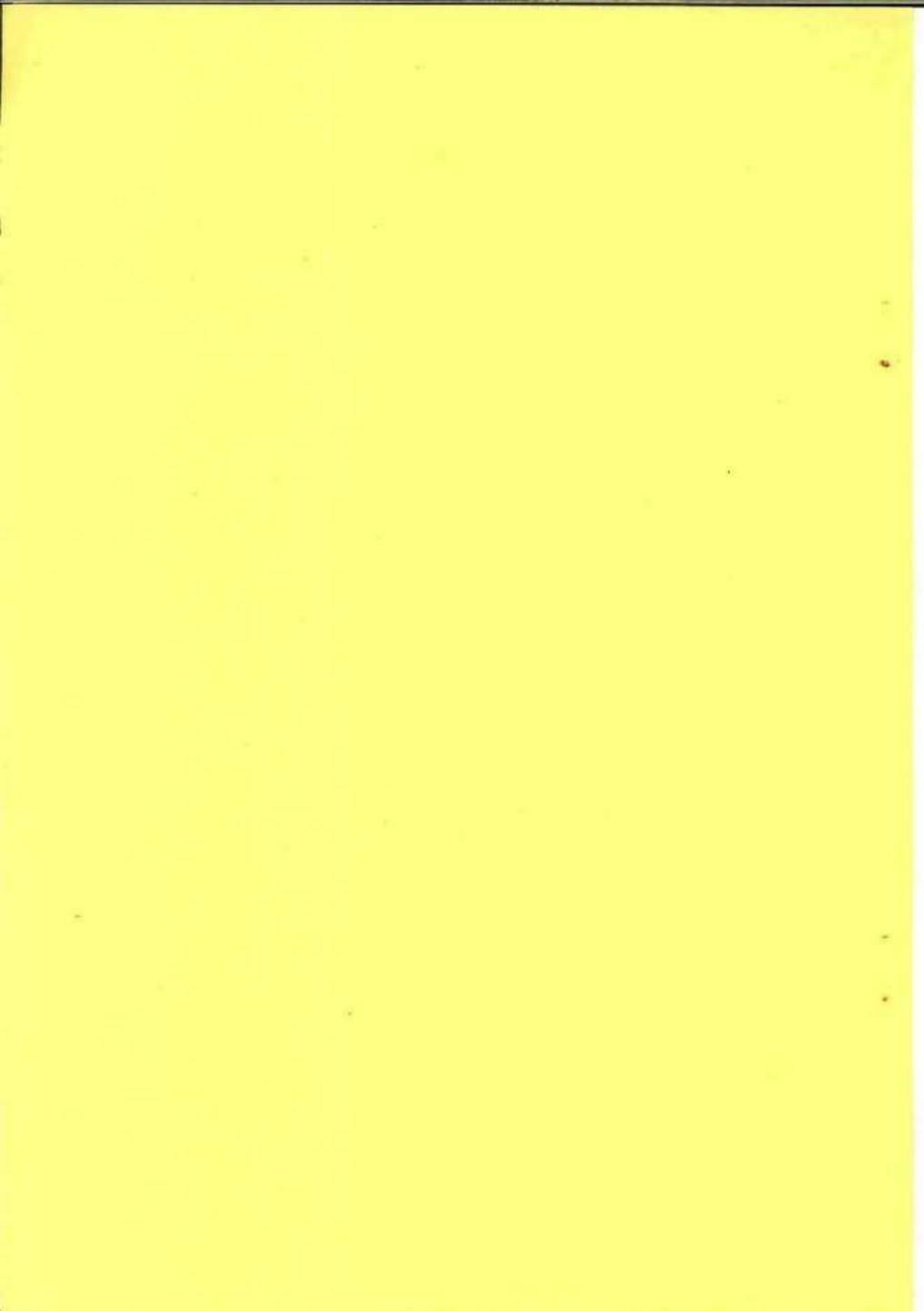


石器出土状况



石器出土状况

菖蒲沢遺跡



目 次

目 次	(3)
挿図目次	(4)
図版目次	(4)
第Ⅰ章 発掘調査の経過	(5~6)
第1節 発掘調査の経緯	(5)
第2節 調査の組織	(5)
第3節 発掘日誌	(6)
第Ⅱ章 遺 構	(7~9)
第1節 住居址	(8)
第2節 土 扱	(8~9)
第Ⅲ章 遺 物	(10~11)
第1節 土 器	(10~11)
第Ⅳ章 ま と め	(11)

挿 図 目 次

第1図 地形図	(7)
第2図 造構配置図	(7)
第3図 第1号住居址実測図	(8)
第4図 第1号住居址カマド実測図	(9)
第5図 第1号土竪実測図	(9)
第6図 出土土器実測図(1:3)	(11)

図 版 目 次

図版1 遺跡近景
図版2 造構(住居址)
図版3 造構(住居址と土竪)
図版4 遺物出土状況

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

戦前、長野県は養蚕飼育では、今回でも有名な県の一つであった。県内でも岡谷市は製糸工場のメッカであり、その煙突が林立していたものであった。なかでも片倉製糸は一大財閥を製糸によって築きあげたのである。

数年来、養蚕飼育は割合に楽になったとはいえ、カイコの成長時期の忙がしさは猫の手もかりたい程である。そこで、伊那農協組合西春近地区の養蚕の先生達が中心となって、共同飼育を奨励し諒訪形地区で初めてのこころみとして、着手されるようになった。当地は菖蒲沢遺跡の東側に該当するとのことで、伊那市教育委員会が中心となって緊急発掘調査を実施する運びとなった。一応、調査は3月中旬に終了するよう計画を組んだ。

第2節 調査の組織

菖蒲沢遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	松沢 一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢 総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委 員	坂井 喜夫	伊那市教育委員長
/	向 上 雅重	長野県文化財専門委員
/	木 下 衛	上伊那教育会会长
/	辰野 伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	竹松 英夫	伊那市教育委員会社会教育課長
/	石倉 俊彦	課長補佐
/	小池 政美	主事

発掘調査団

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
副団長	根津 清志	長野県考古学会会員
/	御子柴 泰正	/
調査員	小池 政美	/
/	田畠辰雄	/
/	辰野 伝衛	/
/	福沢 幸一	/
/	赤羽 義洋	国学院大学学生

第3節 発掘日誌

昭和51年3月15日 グリットを南から北へ1～15西から東へA～Rと決め、1辺を2m×2mと決める。グリットを1つおきに掘り始め、遺物は相当量の出土をみたが、遺構の検出はなかった。

昭和51年3月16日 グリット掘りを東へと進行させていくが、本日も少量の遺物の出土はあったけれども遺構らしきものは影・形もみられなかった。本日の掘ったグリットでは平均的に耕土の深さは20cm位と割に浅く、その下部のローム層には耕作時による攪乱のあとが各所にわたって無残な傷跡を残していた。

昭和51年3月17日 最初に設定した全てのグリットを掘り尽してしまったので、南側に新たにグリットを設け掘り始める。最初のグリットより多量の土師器や須恵器の発見があり、不思議に思って精査を加えてみると土層の変色がみられたので第1号住居址とする。2つの遺構の検出と同時に拡張作業も続行する。

昭和51年3月18日 昨夜来の雨のために、土の湿気が多かったので、道をへだてた北側へグリットを設け、掘り進めていくが、遺物は何も発見されなかった。

昭和51年3月19日 北側のグリットを昨日に続いて掘り進めていく。

昭和51年3月20日 第1号住居址の掘り下げとその清掃並びに写真撮影をする。清掃していく段階でM7に新たに長円形の黒土の落ち込みがみられ、第1号土坑とし、その拡張と掘り下げを実施する。第1号住居址を掘り下げていくとカマドや土師器、須恵器が出土して、住居址としての最低条件の要素が整ってきた。

昭和51年3月22日 第1号住居址、第1号土坑、を完全に掘り上げ、その清掃と写真撮影を終える。

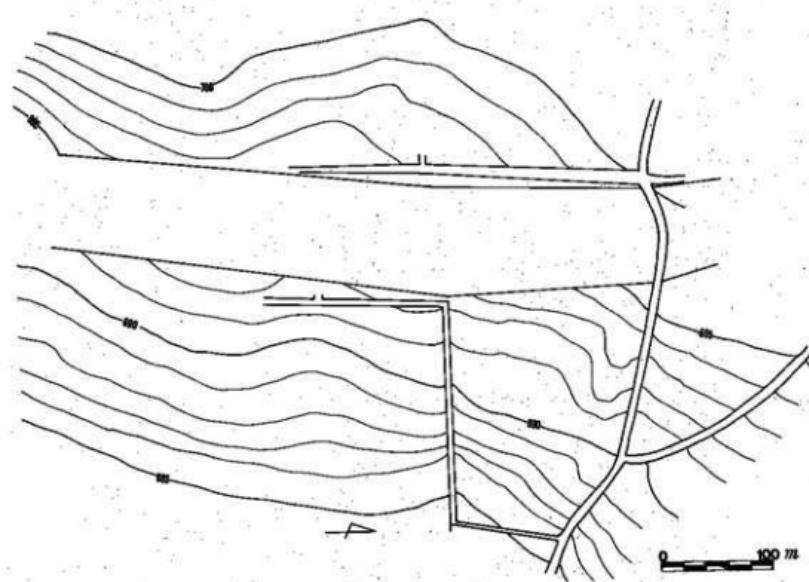
平板実測や全廻図を作製する。

(小池政美)

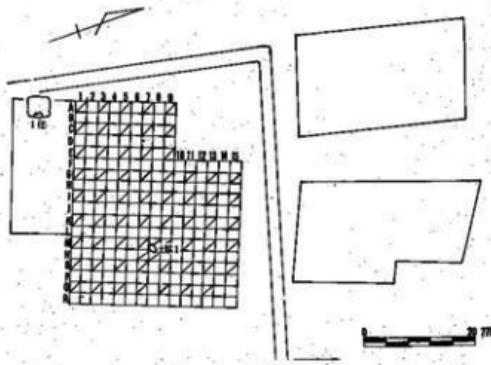


発掘風景

第Ⅱ章 遺構



第1図 地形図

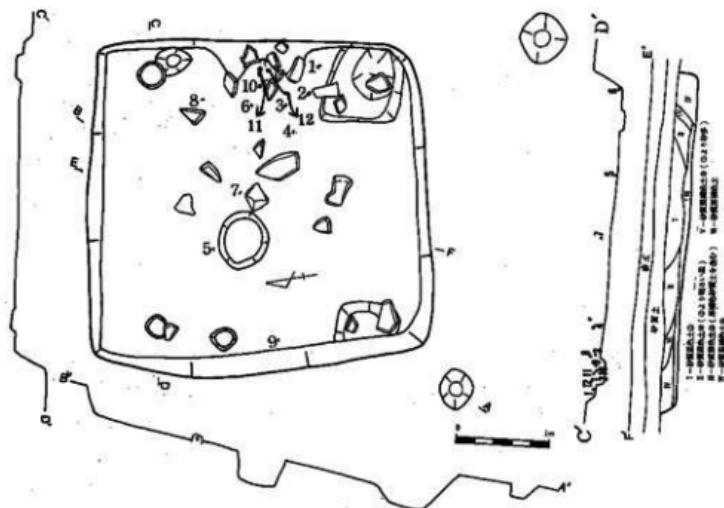


第2図 遺構配置図

第1節 住居址

第1号住居址 (第3・4図、図版2)

本址は用地内調査区西埋理から検出された奈良時代の堅穴住居址である。表面から3層目の砂質褐色土を掘り込み、床面はやや軟弱ではあるが、凹凸は少なく良好である。プランは長・短軸3m 66cm × 3m 51cm、壁高は10~30cmを計る方形堅穴住居址で、主軸方向はN83度Eを示していく。東壁中央に石組粘土カマドを有している。カマド内の焼土の層は約5cmの厚さで堆積していた。柱穴は住居址内に4ヶ浅い柱穴をうがら、壁外にも南側に2ヶうがっている。また住居址床面中央に長・短軸62×52cmの長円形の土括があるが、土括の上面に貼り床は認められなかった。カマド南側には貯蔵穴と考えられる落ち込みがある。床面の中央に拳大程の石がいくつもあり床面についているもの、それよりやや浮いているものとまちまちであるが、性格不詳。



第3図 第1号住居址実測図 番号は遺物出土番号

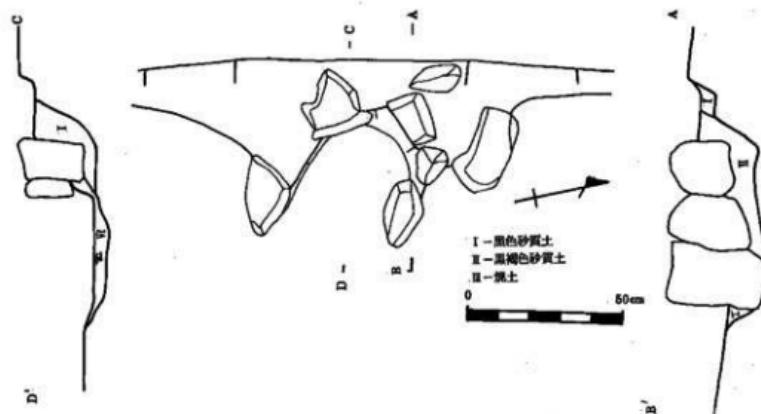
第2節 土 括

第1号土括 (第5図、図版3)

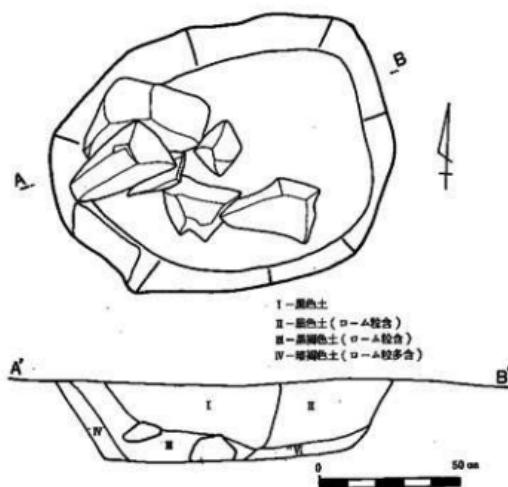
第1号土括は用地内調査区の東縁中央から検出された。長・短軸は1m 22cm × 94cm、深さ、27cmの不整長円形の土括である。表面から4層目の茶褐色土層を掘り込んでいる。土括の床面は軟弱ではあるが平坦、壁は外傾する。土括内にかなり大きな石が6個、西側に寄ってはいっている。

遺物はなく時期不詳

(田畠辰雄)



第4図 第1号住居址カマド実測図



第5図 第1号土坑実測図

第一章 遺物

第1節 土器

第6図(1～14, 18)は第1号住居址内より出土した遺物である。カマド周辺には床面よりやや浮いたあたりに集中している。床面での検出は少量であった。

遺物には、須恵器壺(1～3, 6)、須恵器壺(14)、土師器壺(4～5, 7, 10)、土師器壺(11～13)などが出土している。須恵器高台付壺(1)は青灰白色。小石粒を多く含む胎土をもち粗雑である。焼成もやや不良。口唇部はやや外反、胴部はまっすぐに底部へと連なる。底部は糸切りの後、回転へう整形、内外面ともロクロ整形痕が顕著である。

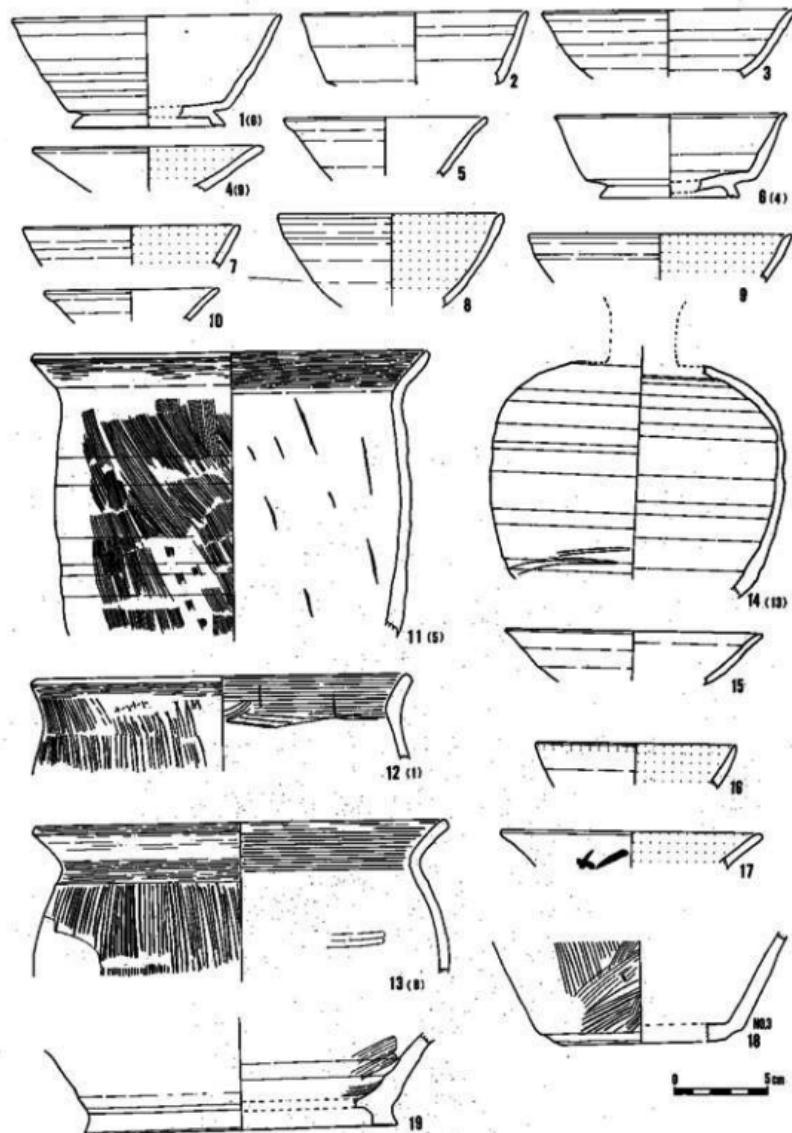
(2)は床面出土の須恵器高台付壺と思われる。やや粗雑な胎土、小石粒を少量含み、内外ともロクロ整形痕が認められる。(3)も床面近くの出土、須恵器の壺で、青灰色、小石粒を含み、粗雑な胎土である。口唇部はほぼ直立し、内外面ともロクロ整形、とくに内面の整形痕は顕著である。

(6)は須恵器高台付壺で、胎土は灰白色、小石粒石散され良好である。口唇部は外反し、胴下部がふくらんでいる。底部は、中央に向って下っており、糸切りの後回転へう整形を行っている。焼成も良好である。(14)は須恵器の壺で、灰白色、長石粒を少量含むら密な胎土をもち、肩部より上に若干の自然縫がかかる。肩部はやわらかい丸みをもち胴部へと続いている。内外面ともロクロ整形痕が顕著である。(5, 10)はカマド内より出土した土師器の壺で、(5)は小石粒雲母を少量含み、外面青褐色、内面明褐色、内外面ともロクロ整形を施してある。口縁部は口唇部下で急に外反するが、口唇部は内彎している。胴部はふくらむことなく底部へと緩ぐものと思われる。(10)は(5)に比べ小形であるが、胎土、色調、整形などは(5)とはほぼ同一である。口縁部はほぼ直にのびている。(4, 7～9)は土師器の内面黒色の壺である。(4)は、外面の色調は灰色がかった褐色、小石粒を少量含む胎土であり、内面は研磨されることなく、やや荒れている。口縁は直にのび、かなり急激に底部方向へとせまくなる。

(7)は覆土出土で、外面の色調は赤褐色を呈している。かなり磨耗しており、内面は研磨されではない。口縁部は直に立ちあがり、ゆるやかな傾斜で底部方向へのびている。(8)は跳で覆土出土、小石粒を含み、粗雑な胎土である。内面は研磨されておらず、外面の色調は暗褐色、口縁部は若干内彎気味、ゆるやかな傾斜の胴部で、底部近くになって丸みをもつ。

(9)は外面の色調は明褐色、小石粒を含み、かなり磨耗している。口縁部は外反し、胸部は丸みをもつ。(11～13)は土師器の長胴壺である。(11)は外面暗褐色、内面は灰色がかった褐色をしており、外面に二次焼成度が認められる。胎土は小石粒少量、雲母を多量に含む、焼成は良好、ほぼ直立する胴部から頸部はやや細くつまり口縁部は外反するもやや丸みをもち口唇部はやや内彎している。口縁部は内外面とも横ナデ、内面の方が顕著である。頸部から胴部にかけては、極細のカキ目が、縱あるいはなめの方向に何回かにわけて施されている。

(12)は内外面ともに色調は明褐色、雲母を多く含む胎土である。整形は外面口縁部横ナデ、口



第6図 出土土器実測図 (1:5) ()内の番号は住居址遺物出土番号

縁下から頸部、肩部にかけて櫛状工具による縱方向のカキ目が施され、カキ目一本、一本の幅はせまい。内面の口縁部は櫛状工具による横ナデが施され、縦に幅 9.5 mm の櫛状工具の原体と思われるものの押しつけた痕が見られる。肩部から頸部、口縁へとゆるやかに外反していく型である。

(13)、色調は(11)に似ており、胎土も(12、13)と同様に雲母を多量に含んでいる。器形はかなり丸みをもつ胴部から急激につぼむ頸部を以て口縁は急角度で外反する。整形は、外面は口唇部から頸部にかけて横ナデ、肩部以下は櫛状工具による縱方向のあらいカキ目が施されている。内面は口縁部櫛状工具による横ナデ、胴部はヘアによる横ナデ整形がみえる。(18)は土師器の甕の底部、外面は櫛状工具によるカキ目が縱、横ナメに施されており、やや難なつくりである。二次焼成痕顔者である。

その他の遺物としては、須恵器の壺底部、土師器壺などがあり、常滑の破片も 2・3 点出土している。他に、灰釉陶器、砥石なども出土している。
(田畠辰雄)

第四章 まとめ

当遺跡は地形上から見ると藤沢川が押し出す扇状地上に展開する。北側が高く丘状になり、中央部は低く、南東に緩く傾く斜面からなっている。昭和 47 年度に中央道の調査時に当遺跡から奈良時代の住居址が 1.1 軒、土括 4 基、マウンド 2 基、集石 1 が検出されており、とくに中央部の低くなる凹地からは 1.0 軒の住居址が検出されている。今回の調査において発見した住居址も、中央の凹地からで、中央道のすぐ近くから検出されており、当住居址も 47 年度調査における 1.0 軒とグループになる住居址であろう。今回の調査において中央道より東からは住居址 1 軒、土括 1 基の発見にとどまり、当遺跡の中心は中央道内とそれより西側の山沿いと考えられる。今回の調査した第 1 号住居址の遺物を見てみると、土師器と須恵器のみで灰釉陶器は 1 片も出土していない。量的に見れば須恵器より土師器の方が多い。須恵器の壺は高台付のものが多く、糸切りの後、回転へう整形されるものと、ヘア切の後回転へう整形されるものとが混存しており、後者はヘア切り手法のため底部が中心に向って下がる。土師器の壺では内面黒色のものが多く、胎土はがさついた感じのものが大多数である。また内面の研磨されているものではなく、そのためか内面の磨耗がはげしい。甕は長脚のもので、頸部に弱い継縫をもつものが 1 点ある。胴部に丸味をもつものとそうでないものとが混存し、整形技法は粗いカキ目を有するものが主産をしめ、刷毛状工具による極細のカキ目を有するものは少ない。

(田畠辰雄)

図 版



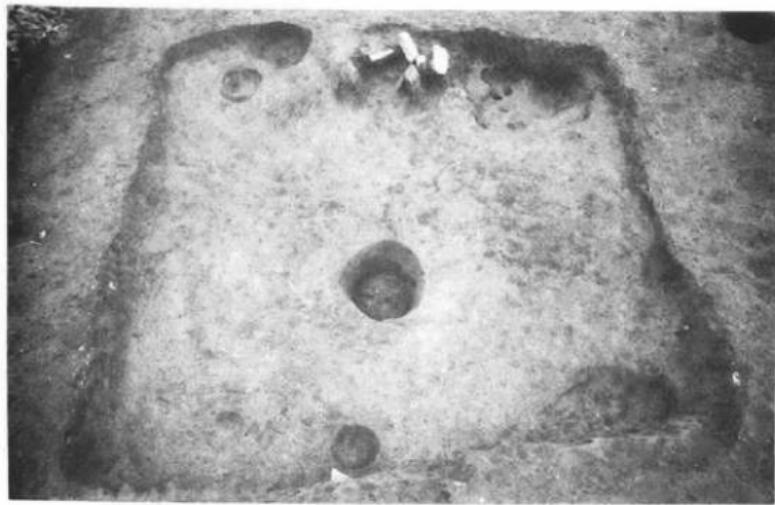
遺跡地を南側より望む



遺跡地を南側より望む



第1号住居址の断面地層のある状態



第1号住居址

図版2 遺構（住居址）



第1号住居址カマド



第1号土坑

図版5 遺構（住居址と土坑）



第1号住居址カマド附近遺物出土状況



土器出土状況



土器出土状況

浜射場・菖蒲沢遺跡

緊急発掘調査報告

昭和52年3月22日 印刷
昭和52年3月25日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 長野県伊那市美篠上大島

みすず創美社

